

バーミヤン谷における 考古調査

はじめに 文化財研究所はアフガニスタン情報文化観光省考古学研究所と共同で、2003年度よりバーミヤン谷において文化遺産保護のための調査やアフガニスタンの専門家に対する研修をおこなってきており、2005年度は2度の現地調査をおこなった。その活動の中から考古学関係の調査研究について述べる。

第4次調査 2005年6月15日～7月12日に現地調査をおこなった第4次調査の一環として、保護されるべき遺跡の範囲を確定するための現地踏査を実施した。著名な大仏がある大崖を中心とする範囲についての現地踏査は2004年度に実施した第3次調査の際にすでに実施しており、今回はバーミヤン谷の本体部の中で未踏査であった、より上流域（西方）とより下流域（東方）を中心におこなったものである。

その中では、次のような成果が得られている。大仏が刻まれた大崖の東部で崖から石窟ごと崩落した岩塊を発見し、石窟内に壁画を確認した。バーミヤン谷の西端にあたるコレ・ジャラルにおいて仏教石窟を確認し、一部の窟で壁画を発見した。フォーラーディー谷においては、従来、建築についての報告があったフォーラーディー西A窟で壁画を発見した。また、その西の崖では副葬品を伴う石窟墓を確認した。イスラム教徒ではない人の墓と考えられる。

今年度の調査においても数多くの新発見が得られていることから、長く知られている著名な遺跡群の近くであっても、より詳細で広域の分布調査が大切であることが再確認できよう。

第5次調査 第5次調査は2005年の11月9日～12月6日に現地調査をおこなった。専門業者に委託しての地下探査も実施した。これは、2003年度に広範囲の探査をおこなった続きにあたるもので、特定の地区について測線の密度を高くして詳細調査としておこなうものである。

遺構の存在確認手順として、まず探査をおこないその結果を見た上で、試掘調査を実施する。試掘調査の成果と探査成果を比較することで、よりよい探査手法への改良も可能となると考えられる。試掘調査をおこなったのは

一地区、タイプティー地区の3ヵ所である。

ジュー・イ・シャフル地区は中世の都市遺跡として知られるシャフリ・ゴルゴラと呼ばれる丘の北西に広がる地区で、第3次調査の際にそれまで報告されていなかったストゥーバが確認された場所にあたる。地表面にはこのストゥーバの痕跡が石積みの丘となって残っている。衛星写真からも周辺に方形の区画などが読み取れる場所である。今回は、丘から東にかけて地下探査で反応のあった部分に調査区を設定した。

その結果、大型の礫を敷き並べては、土を積むという工程を繰り返して作られたストゥーバの基壇を検出した。試掘範囲はすべて基壇の中に納まっていて、基壇の端は確認できなかった。また、この基壇を壊す形で掘られている穴を複数確認した。これらの穴は地表面近くから掘り込まれていて、比較的最近の農作物用貯蔵穴と考えられる。バーミヤンは冬季に大変寒冷な地域なので農作物の凍結を防ぐために土中に保存する。貯蔵穴を埋めている礫は礫間に隙間が多くまた個々の礫の形も角ばっていて、基壇に積まれた礫とは様相がかなり異なるため、地下探査で明瞭な反応を示したのと考えられる。この調査区からはあまり遺物が出土していない。

ガーズイー・ダウーティー地区は西大仏と東大仏との間に位置し、玄奘の『大唐西域記』に「先王の伽藍」がある場所と記載されている所に比定されている。今回の調査区の中では大崖にもっとも近く何らかの遺構が存在している可能性も高いと考えられた。

試掘調査した地点は予想通り堆積土が厚く、遺構面は地表下1m50cm付近であった。レーダー探査では明瞭な遺構を前もって把握できなかったのは堆積土が厚いことが原因のひとつと考えられる。試掘調査では、何らかの基壇の掘り込み地業と考えられる遺構を検出した。調査区が狭いため地業の西端ラインを確認しただけで、東西・南北の広がりやどこまでなのかは不明である。また、この基壇に伴うと考えられるカマドも見つかった。基壇が築かれたと考えられる面より下位の地層もわずかながら遺物を包含しており、この地区では長い時期にわたる遺構・遺物の堆積が考えられる。発掘調査で掘り下げながら再度調査区内を探索するといった方法も検討すべきであると考えられる。

『大唐西域記』は「王城」の存在を記しているものの、

地表に遺構が残っておらずその位置は確定していない。今回の調査では、西大仏の南西方向に広がるタイブティー地区を王城と推定し、詳細な地下探査と試掘調査をおこなった。調査は積雪という悪条件をおしておこなったものの、明確に仏教時代にさかのぼる遺構は検出できなかった。地形からみると遺構の広がり考えられる場所であったので、今回の調査結果の解釈が問題となる。遺構は見つからなかったものの、表土にはかなりの遺物が包含されているので、今回の調査区よりも斜面の上方に遺跡の存在を推定できようか。

今回、いずれの調査区においても日本人専門家とアフガニスタン人専門家が協力して調査にあたっており、調査方法に関する技術移転にも貢献したと考える。

遺跡は崖面にだけ存在しているのではない。パーミヤーン地域全体で遺跡の分布や変遷、それぞれの機能などについて総合的に考えていく必要がある。（森本 晋）



図5 ジュー・イ・シャフル地区の調査



図6 ガーザー・ダウティー地区の調査

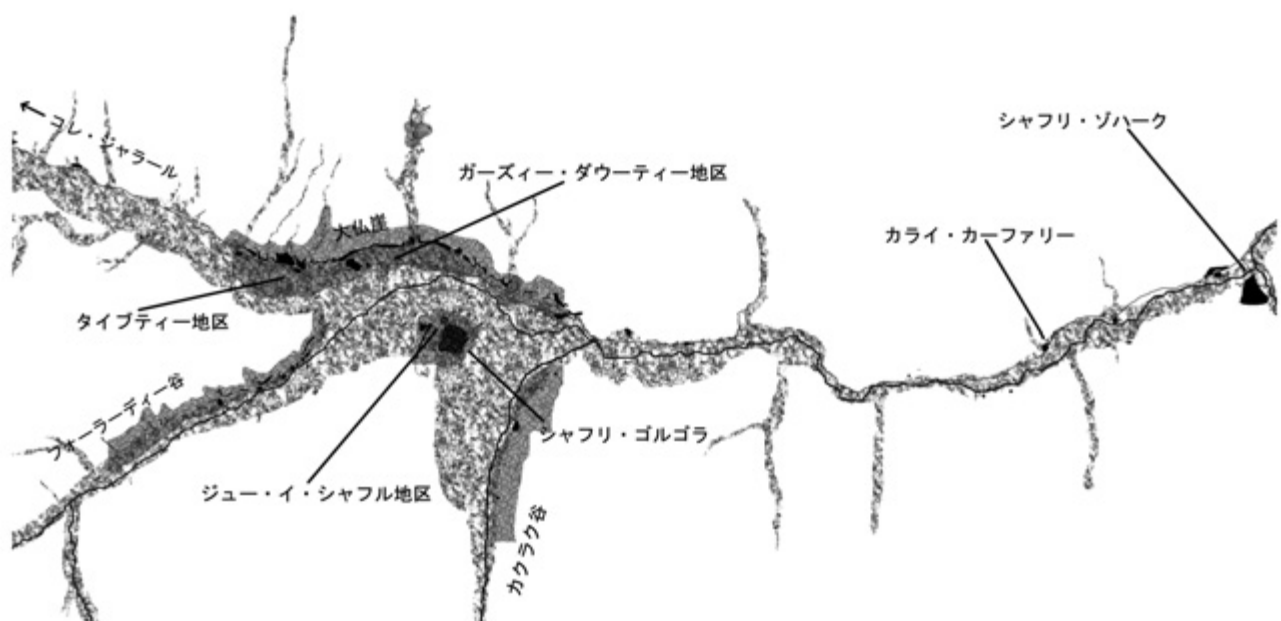


図7 パーミヤーン谷概念図